

第9回 口腔機能って何だろう？

＝ 「口腔機能（飲み込むこと）」は、パーキンソン病等にも関係する ＝

北九州在宅医療・介護塾
塾長 久保 哲郎

前は、「口腔機能」に関連してアルツハイマー病について触れましたが、今回はパーキンソン病との関連についてご紹介させていただきます。

パーキンソン病の発症原因は現時点では不明ですが、大脳と脊髄、小脳を結ぶ伝導路といわれている中脳の大脳基底核(黒質線条体)の変性によって神経伝達物質であるドパミン(運動調節、ホルモン調節、快の感情、意欲、学習等に関わる)の産生が減少した結果、“手足が震える”、“筋肉がこわばる”、“動作が遅くなる”、“歩きづらくなる”等の症状が現れ、そして「口腔機能」に対しては、パーキンソン病患者の約半数に“飲み込めない”等の「嚥下障害」が病初期から診られたり、その障害が身体機能の重度化とは必ずしも関連しないこと、そしてむせのない誤嚥が多いことや、摂食・嚥下の各相にわたって多様な障害が診られるといわれています。

ところで、何故パーキンソン病に「嚥下障

障害」が併発するのでしょうか？

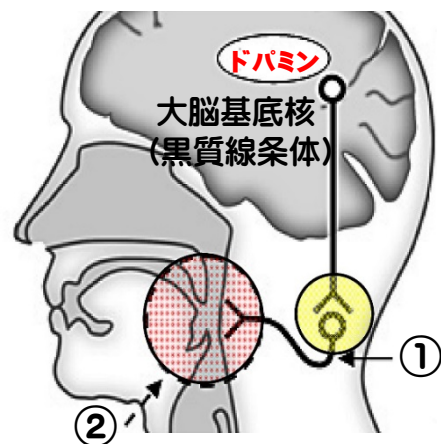
それは、「嚥下」が起こるためにはドパミンが関与しているからです。

つまり、口腔・咽頭は消化管の入口(参照：第3回 口腔機能って何だろう?)にあたり、咀嚼による食塊形成後に食塊を食道に送り込む(咽頭期)ためには咽頭部(消化管の一部)を構成している平滑筋の収縮が必要となりますが、この平滑筋の収縮(嚥下)に関与する神経伝達物質であるサブスタンスPは頸神経節(迷走神経・舌咽神経・舌下神経)で産生され、その産生量は前述した大脳基底核で産生されるドパミンの量に関係すると報告されています。

従って、「口腔機能」に障害が診られた場合には、その原因を口腔に限定するのではなく全身状態の知識も得ておくことが肝心であり、ここに多職種連携・協働を図る意義があるといえます。

サブスタンスPの産生→蓄積→放出

- ①: 迷走神経・舌咽神経の知覚枝が関係している頸神経節で、**ドパミン**により**サブスタンスP**を産生します。
- ②: 産生された**サブスタンスP**は咽頭や気管の神経末梢部で蓄積されていますが、食塊等による咽頭部通過の際の刺激によって**サブスタンスP**が放出された結果、咽頭が収縮し嚥下(嘔吐)が起こります。



(「臨床の口腔生理学に基づく 摂食・嚥下障害のキュアとケア」：館村 卓、医歯薬出版、2009)